

【26】ダムと河道 ―古くて新しいテーマ

明治時代終期から本格化した平野部での治水工事（洪水対策）は、対象とする大洪水のピーク流量を河道内に閉じ込めて流下させるという考えから、河道巾を広げ河道沿いに高い堤防を築くというものでした。

わが国の河川は急流で流域面積に比してその洪水時の流量は著しく大きく、短時間ではあるにしても平常時の流量より何十倍、何百倍の流量を流さなければなりません。そのため、河道巾は大きく広くなり、平常時の小さい流れを流す「低水路」の他に、洪水時に水が流れる「高水敷」を設けることになります。

今から殆んど百年前に、ダム湖の貯水による河川整備（当時は“河水統制”と称した）の提唱者である内務省土木試験所長の物部長穂の意見書には興味深い考えが示されているので、原文のまま紹介します。

“……河川の改修によってできました広大な河道が、その全能力を発揮する期間というものは極めて短いものであって、一年間に割り当てまして数時間ないし、十数時間のものに過ぎぬ。もし豪雨の際に数時間ないし十数時間の雨量を水源で貯えまして、これを水電なり灌漑なり舟運なりに入用な量ずつ流出せしめたならば河川の敷地は余程縮小でき、また既に広い敷地を有している河川においては、その敷地すなわち堤外地を耕地として利用することができる。”とあります。

基本的な考えは、現今の多目的ダムの治水利水思想と変わりませんが、河道の負担を減らすことが土地利用の高度化になると評価している点が、時代の価値観を反映しています。広い河道は一般の市民からすると、大洪水時以外は無駄な土地に見えてしまいましたが、現在では都市域では公園や運動場として田園地帯では生物の生息場など自然環境の場として貴重な公共空間となっています。